書　評

和田重正著

『自覚と平和』

松　田　高　志

この数年、世界の動きは、目を見張るばかりである。これほど意外な、しかも重大な出来事が相次ぐのも珍しい。このような時代に遭遇すると、知識や情報がふんだんにありながら（或は、あるからこそ、と言うべきか）、我々の視野がいかに狭く、発想が硬直しているかを痛感させられる。惰性的な思考ではなく、歴史の不思議さとその可能性に常に開かれた自由な思考が求められているような気がする。

この『自覚と平和』と題する書は、平和論であり、平和運動（活動）論であるが、しかし同時にそのまま著者の人間観でもあり、宇宙論でもある。本書は、甚だ単純な提案をしているように思われる。あたりまえのことをあたりまえにしようと呼びかけている。この不透明な時代にあって、我々のめざすべき理想が掲げられており、未来への展望が示されている。但しこちらが、惰性的な思考にとらわれない限りであるが。

今日の世界は、依然として戦争状態を脱することが出来ず、又それと深く結びついた経済競争、南北問題、民族問題等は、悪化している。又戦争と直接関係はないが、環境汚染や資源奪取による自然破壊、物質主義による人間性の喪失等の問題も深刻である。それらは、単に政治、経済、環境の問題に留まらず、人間の心身の内奥にまで侵蝕している。

著者の和田重正氏によれば、この世界的危機は、生半可なやり方では越える

ことが出来ない。我々一人一人が、真に自覚に徹して自分自身が変わらなければならないのである。著者の平和論には、次のような人間観が根柢にある。自然界は、争い合い、奪い合う弱肉強食の世界のように見えても、全体としては驚くほど生かし合い、補い合う調和的、発展的世界である。そうでなければ、これ迄の地球の進化は考えられない。そこには、無論人類も含まれている。自然界の表層のみを見て、攻め合い、奪い合いを自然の本質と見なすことが出来ないように、人間の場合もそれを本質的な姿とすることは出来ない。自然も、そのうちに含まれる人間も決してバラバラに存在し、互いに対立し合っている訳ではない。確かに五官にはそのように感じられるが、全体から見れば、それは単に表層の一面である。自然、そしてその一員である人間は、全体として決してバラバラな存在ではなく、生かし合い、補い合う調和的、発展的存在である。

あらゆるものが、生かし、生かされつつ発展していく世界を、著者は特にいのちの世界と呼んでいる。このいのちの世界が人間にとっても真実なものであるかどうかは、いかに矛盾、対立した現実にあっても、生かし合い、補い合う生き方が出来るかどうか、又そのことによって真に自由と安らぎが得られるかどうかにかかっている。これは、既に過去の多くの宗教者によって気づかれたことであるが、著者自身も又、これが真に根源的な生であることを自覚し、身をもって証しようとしている。

ここから、著者によれば、平和実現の活動は、二通り考えられることになる。一つは、従来からの反戦、反核運動であり、集団ないし世論の力を高めていくことによって、戦争勢力を抑えるやり方である。これは、最近の世界の動向を見ても、それなりの意義や効果を持っていることは明らかである。しかしこれだけでは、戦争の根本原因や戦争への不安を解消することは出来ない。

もう一つは、既に少し触れたように自覚による自分自身の変革である。つまり、人間は互いにバラバラで対立しているという人間観から、いかなる人間も決して赤の他人ではなく一つにつながり合っているという人間観への転換であ

り、その実践である。これは、反戦運動のように、戦争勢力に対決するものではない。対決する限り、攻め合い、争い合いの人間観は、消え去ることなく、かえって固定されるが、これは、むしろ対立を越えて平和を創造するのである。

その平和活動は、我々の日常生活からかけ離れた政治的運動ではない。又その平和は、単に戦争がないという静的なものではない。平和は、生かし合い、助け合い、共に成長し、発展し合うダイナミックな状態であり、平和創造活動は、日常生活をはじめとして、国際協力、援助に至るあらゆる領域において行なうことが出来る包括的なものである。それは、戦争をなくすというだけでなく、ダイナミックな平和世界を作り出す積極的、創造的なものである。これは、著者によれば、まさに自由と安らぎと生き生きした力が得られるいのちの流れの方向である。そして結果として、戦争勢力は、浮き上がったものになり、その力を失わざるをえない。比喩的に言えば、これは、病原菌をやっつけたり、患部を除去する対症療法ではなく、生活を整え、体を整えることによって、自然治癒力を高め、心身の全体を健康にし、更に健康増進に向かう養生的やり方である。

以上のような平和論及び平和運動（活動）論は、まことに単純素朴なものであるとも言える。しかしそれだけにかえって包括的であり、根本的である。このような平和論は、おそらく他に類を見ないが、本書においては更にもう一つ重要な主張が見られる。つまり、一人一人の自覚において人間観を転換し、平和創造的に生きていくことと呼応する形で、日本の現憲法を積極的、能動的にとらえ直すということである。

内外の何百万人もの命を奪い、無数の破壊をもたらした未曾有の悲劇に対する反省と新生への決意の中から成立した現憲法は、単に合理性、普遍性を持つだけのものではない。諸々の犠牲を決して無駄にしないだけの世界史的意義と使命を持った憲法である。世界史上初めて戦争放棄と非武装を宣言した憲法は、我々の心底からの痛切な平和への願いであり、人類の永年の理想を一挙に表わしたものである。しかし著者によれば、この憲法は、ただ軍隊を持たない、

戦争をしないという消極的規定を示すだけのものではない。その成立時の多くの国民の真実の気持からして、世界中の平和を願う人々と共に、あらゆる努力を払って平和的方法により世界平和を実現しようという決意表明に他ならない。

これは、いわば憲法の積極的、能動的解釈である。このような解釈によって初めてこの平和憲法の真の意義と使命が十全に理解出来るのである。単なる消極的解釈では、現実的にどうしても矛盾に満ちたものにならざるをえない。制定当初は、この積極的内容を実践する現実的諸条件がほとんど欠けていたが、その後現実的条件が満たされたにも拘わらず、残念なことにその積極的趣旨は、まともにそれとして取り上げられることなく今日に至っている。

著者は、二十年来この主張を掲げて来たが、本書において、まだ遅くはないとして、今我々が本気になって努力をすれば、世界全体の流れを変え、平和への潮流を確実なものにする力を持つであろうと述べている。確かに、平和憲法を掲げる我々こそ、平和創造を先導する光栄ある役割をになう者であろう。しかもそれを遂行するのに十分な現実的諸条件が既に備わっていると言える。それは、現在の世界情勢の中で、最も適切な活動であり、又未来の展望を開くものに他ならないであろう。

自覚と憲法問題とは、一見全くかけ離れたもののように思われるが、しかし著者によれば、今、この世界の状況の中で一つに結びつかなければならないし、又この破局的危機においてこそ結びつくことが出来、相互循環的に高め合うことが出来るのである。

既に述べたように、今は、平和問題だけではなく、多くの難問が複雑にからみ合っている。経済戦争、南北格差の増大、地球生態系の崩壊、商業主義や科学・技術の乱用による人間疎外、諸々の差別問題等に対し、当面の具体的方策は、確かに必要であるが、しかし現象面の対応だけでは解決出来ないことも又切実に感じられている。この解決は、現象面の努力だけでなく、人間観の転換による根源的な生の変革がなければならないであろう。

これは、著者の言葉で言えば、人類の進化の方向であり、いのちの流れそのものに他ならない。つまり、いわば人類が自己主張により発達をとげた青少年期から、全体の立場に立ちうる成熟した大人へと脱皮することであるとも言える。

このようなことは、一方からは余りに楽天的であると見られるかもしれない。しかし又他方からは実現出来そうにない困難事と思われるかもしれない。しかしこの自覚と平和創造が実行されるかどうかは、一人一人が惰性的な思考を改めうるだけの危機感を持ちうるかどうかにかかっていると言ってもよいであろう。

なお本書の理解を深める為に、著者の人間観が最も包括的に論じられている『もう一つの人間観』（地湧社刊）が参考になるであろう。これは、宇宙の進化から説き起こされ、宗教論、現代文明論にもなっている書である。更に一冊、本書の理解を豊かなものにしてくれるものとして、ほぼ同時期に書かれた『母の時代』（地湧社刊）を挙げることが出来る。この書は、我が子において自他一体感を自然に持つことが出来、その一体感を広げつつそこから発想し、行動しうる母親がこれからの時代の中心的存在になるべきであり、又なることが出来ると述べている。しかし又現実問題として、子育てないし親子関係において最も行き詰っているのも母親である。母親自身が、人間観、価値観を変える以外にどうすることも出来ない所に来ている。母親の勇気ある自己変革が、新しい時代を開く先駆けとなってくれることを著者は願い、予感している。

（くだかけ社刊、1987年10月、本文263頁、1500円）